

煙突掃除人バートは、なぜ「最高にラッキー」なのか ——煙突掃除人のイメージの変遷——

野 間 正 二

1964年に制作された映画に、『メリーポピンズ (*Mary Poppins*)』がある。監督はロバート・スティーブenson (Robert Stevenson)。一九六四年度のアカデミー賞で五部門を獲得した。この有名な映画の原作はトラヴァース (P.L. Travers) の『風にのってきたメアリー・ポピンズ (*Mary Poppins*)』(1934年)である。

そのなかで、登場人物のバート (Bert)、本名ハーバート・アルフレッド (Hebert Alfred) が歌う歌がある。『チム・チム・チェリー (*Chim Chim Cher-ee*)』である。アカデミー賞では主題歌賞を獲得した。このミュージカル映画の中で、もっとも有名な曲である。

『チム・チム・チェリー』の歌詞は、オリジナル・サウンドトラック盤によると、つぎの様になる。

Chim chim-in-ey, chim chim-in-ey chim chim cher-ee !
A sweep is as lucky, as lucky can be
Chim chim-in-ey, chim chim-in-ey chim chim cher-oo!
Good luck will rub off when I shakes 'ands with you
Or blow me a kiss and that's lucky too
Now, as the ladder of life 'as been strung
You might think a sweep's on the bottommost rung
Though I spends me time in the ashes and smoke
In this 'ole wide world there's no 'appier bloke
I choose me bristles with pride, yes, I do

A broom for the shaft and a brush for the flue
Up where the smoke is all billered and curled
'Tween pavement and stars is the chimney sweep world
When there's 'ardly no day nor 'ardly no night
There's things 'alf in shadow and 'alfway in light
On the rooftops of London coo, what a sight!
Chim chim-in-ey, chim chim-in-ey chim chim cher-ee!
When you're with a sweep you're in glad company
Nowhere is there a more 'appier crew
Than them wot sings, "Chim chim cher-ee, chim cher-oo!"
Chim chim-in-ey, chim chim cher-ee chim cher-oo!

上の原詩の日本語訳は、同じサウンドトラック盤の付録についている、川村
ひろこの訳によると、つぎのようになる。

チム・チムニー チム・チムニー チム・チム・チェリー
煙突掃除ってのは最高にラッキーさ
チム・チムニー チム・チムニー チム・チム・チェルー
握手をすれば幸運が訪れる
投げキッスをしておくれ それもラッキー
人生をハシゴとすると
煙突掃除が一番下の段だと君は思うかもしれない
でも すすと煙まみれで過ごしていても
この広い世界に これほど幸せな奴はいないさ
すすかき棒を選ぶにもプライドを持って
シャフトにはほうき 煙道にはブラシ
煙が渦を巻く空の上
舗道と星のあいだは煙突掃除夫の世界さ
昼もなく夜もなく

光と影が半分ずつ

ロンドンの屋根の上、何ていい景色！

チム・チムニー チム・チムニー チム・チム・チェリー

煙突掃除夫と一緒になら 君も楽しくなる

この世で一番幸せな時間 歌おう

チム・チムニー チム・チムニー チム・チム・チェルー！

チム・チムニー チム・チムニー チム・チム・チェルー！

この歌の中で、今回とくに注目しておきたいのは、まず、「A sweep is as lucky, as lucky can be（煙突掃除ってのは最高にラッキーさ）」の部分。語学的にもう少し正確に訳せば、「煙突掃除人はラッキー（幸運）そのものと同じ程ラッキーなんだ」となる。煙突掃除人はラッキーを体現した存在だと、バートは自称しているのだ。

さらにバートは、「Good luck will rub off when I shakes 'ands with you.（握手をすれば幸運が訪れる）」、直訳すれば、「私と握手すれば、ラッキーがつく」とも歌う。それもとうぜんだ。なぜなら、自分自身がラッキー（幸運）そのものなんだと考えているのだから。そして最後には、「In this 'ole world there's no 'appier bloke.（この広い世界に これほど幸せな奴はいないさ）」とさえ、楽しげに歌う。（ここでは、バートは、ロンドンの煙突掃除人という設定だから、ロンドンの下町なまりの英語を喋るということで、Hの音が抜けている。）

つまり、バートによれば、煙突掃除人はラッキーな存在で世界一幸せな人だということになる。

煙突掃除人は、ほんとうにラッキーで世界一幸せなのだろうか。

もちろん、この映画『メリーポピンズ』は、ウォルト・ディズニーの映画だから、きびしい現実を描くのが目的ではない。明るく楽しいのがディズニー映画の特徴だ。とりわけ、この映画は、途中にアニメの部分があるように、ディズニーのアニメ映画の要素も取りいれている。そしてディズニーのアニメ映画の特徴は、「子どもの夢をはぐくむ」ことを主目的にしている。

だから、このディズニー映画の中で、煙突掃除人に扮（ふん）したバートが「(自分は) 最高にラッキー」と、楽しげに歌い踊るのは、とうぜんなのかもしれない。しかし、そのことを考慮にいれても、煙突掃除人のバートが「最高にラッキー」と楽しげに歌い踊ることには、ある種の違和感がわたしには残った。そこで、その違和感が生まれた原因をさぐってみようと思う。

I

まず、煙突掃除人の社会的なステータスはどの辺にあったのだろうか。

バート自身も、「人生をハシゴとすると 煙突掃除は一番下の段だと君は思うかもしれない」と歌っている。この歌詞からもわかるように、煙突掃除人の社会的地位は、社会の底辺にあると考えられてきた。というよりもむしろ、この映画が撮られた1964年でも、煙突掃除人は社会の底辺に位置する考えられていたと解するのが、この歌詞の正確な理解である。念のために言っておけば、この映画の時代設定は1910年ころで、原作の時代設定は1920～30年ころである。だから、バートの歌詞は、1964年ころの大衆の考え方を反映していると思解するのは、時代錯誤のように見えるかもしれない。しかし、映画と観客との関係を考えれば、つまり映画の観客はおおむね同時代の考え方にそくして映像を見ていることを考慮すれば、時代錯誤ではない。

さらにつけ加えるなら、バートは、原作では、「マッチ売り (Match Man)」で、マッチを売ったり、路上に絵を描いて暮らしているという設定だったが、映画では、煙突掃除人に変更されたという事実がある。1964年制作の映画で創造された役柄だから、煙突掃除人への考え方も、1964年とうじの人びとの考え方を反映している可能性は高い。というわけで、1964年ころも、煙突掃除人は社会階層的には最底辺に位置していたと考えられる。

では、社会の底辺に位置する煙突掃除人のバートは、なぜ自分のことをラッキーだとか、世界一幸せな男だと歌うのだろうか。そのことを考える前に、英国の煙突掃除人の歴史をおさらいしておこう。

料理や暖房などのために石炭や木などを燃やすと、煙や一酸化炭素やイオウ

やアンモニアなどが出る。それだけでなく、ススやホコリが暖炉や煙突などにたまる。ススやホコリがたまると、火がよく燃えないばかりか、煙が逆流する。さらに、火事などの原因にもなる。そこで、そのススやホコリを掃除する必要がでてくる。そのススやホコリの掃除を職業にする人を、煙突掃除人 (chimney sweep) と呼ぶのである。

英国の場合、17世紀以降はレンガ作りの家が基本になったから、暖房も各部屋の暖炉にたよる場合が多かった。各部屋の暖炉で、マキ (薪) や石炭を燃やして暖をとった。とうぜん、それぞれの暖炉には煙突が必要になる。すると、一軒の家の中でも、煙道となる煙突が複雑に入りこむことになる。三階や四階ともなればますます複雑になる。

複雑な煙道の掃除は素人にはむずかしい。しかも、ススやホコリを扱うから、身体が汚れるし、危険だ。さらに、上手にやらないと、部屋までも汚れる。だから、煙突掃除人という専門の職業が生まれたのだ。ただし、職業としての煙突掃除人の歴史をさかのぼるのはむずかしく、16世紀になるまで公的な記録は残っていない (Cullingford[2000] 7)。

ジョージ・フィリップス (George Philips) によれば、エリザベス朝 (1558-1603) 以前には、煙突がある家屋は「ほとんどなかった (very few)」(445) そうだ。だが、エリザベス朝になるとすでに、ロンドン市内では、煙突掃除人が「煙突磨き! (Sweep Soot Hol!)」と呼び声をあげながら、市内を流していた (サルガードー 9) ようだ。シェイクスピアの1610年ころの作品『シムベリーン』にも、「Golden lads and girls all must,/ As chimney-sweepers, come to dust. (黄金のように輝く若者も娘も、煙突掃除人と同じように、死ねば塵になるのだ)」(IV ii) と、すでに煙突掃除人は登場している。しかもすでに、黄金のように輝かしい貴族の若者の対極に位置する存在として、煙突掃除人が描かれていることは注目に値する。(余談だが、日本で煙突掃除人が広く独立した職業とならなかったのは、昔の家屋はおおむね平屋で、各部屋の暖房には暖炉ではなく火鉢などを用いたことで、煙突が必要ないか短いうえ単純だったので、専門の技術が必要としなかったのも原因のひとつだと思われる。)

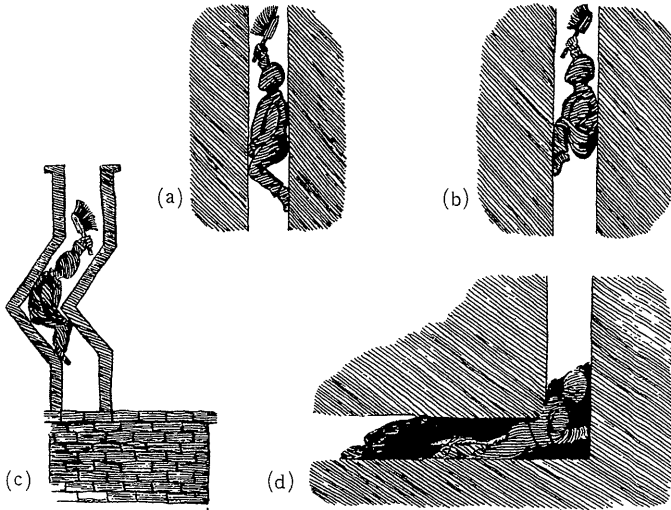
しかも煙道（煙突）は居住空間ではないから、とうぜん狭くなる傾向があった。ダニエル・プール（Daniel Pool）によると、中流家庭の煙突の内径は35センチ×30センチ程度だったが、18センチ×18センチ程度のものであったようだ（239）。

狭く複雑な煙道を掃除するいちばん確かな方法は、煙道の中に入ってススやホコリを掃きだすことだ。となれば、身体の小さな子どもの方が、大人より煙突掃除には適しているのがわかる。煙突掃除の少年の需要は、松村昌家氏によれば、ジェームズ一世（在位1603-25）のころから高い建物が建ちはじめたことと、17世紀に燃料がマキから石炭に代わったこととで高まった（218）。であるなら、煙突掃除人が生まれた初期のころから、少年の煙突掃除人はいたことになる。なお、通常「煙突掃除少年（climbing boy）」と呼ばれているが、少年だけでなく、少数ながら少女の煙突掃除人もいた（Cullingford[2000] 130-31, Website; Child Labor in Nineteenth-Century Literature）。

もちろん、煙道を掃除する器具、たとえば、ジョージ・スマート（George Smart）が1803年に発明したスキャンディスコープ（Scandiscope）なども工夫された。また、ガチョウなどの大型の鳥を煙突から落として、煙突のススを羽根で落とすというやり方も行われた（Cullingford[2000] 6）。しかし結局、そうとう長い間、安い子どもの労働力にたよる方が便利で能率的だったから、子どもが、ブラシなどを使い、ススやホコリを手でちょくせつ掻きだした。それが残酷な現実だった。

子どもによる煙突掃除の様子をイラストで示したものが図版1（松村219）。イラストでもわかるように、大人よりも子どもに適している作業であるのは確かだ。しかしもちろん、そのことと作業の残酷さや非人間さとはまったく別物である。

たとえば、図版1のイラストからもわかるように、煙突の中の子どもは背中与膝と片手で体重を支えながら、頭上のブラシでススやホコリを掃きだしている。とうぜん、ススとホコリは顔に落ちてくる。しかし、人は呼吸をする必要がある。仕事をするためには、目を開けている必要もある。言うまでもなく、膝と背中と片手との緊張を解くとズルズルと下に落ちてしまう。落ちれば、と



図版 1 (松村 219)

うぜんケガもする。想像力の限界のような過酷な仕事だ。

また、煙突掃除人たちは、事故で死ななくても、不衛生から生じる皮膚病や各種のガンにかかって、若くして亡くなったと言われている。1830年代になっても、煙突掃除人が50歳まで生きるのはまれだった (Paroissien 66)。実際に過酷な仕事だったのだ。

また、たとえば1830年代の英国には、掃除をしなければならない煙突が、約五百万本以上あった。そのうち約百万本は機械 (用具) で掃除されたが、残りの約四百万本は煙突掃除の少年たちの手で掃除された。一年にふつう二回掃除したので、煙突掃除の少年たちは、一年に約八百万本の煙突を掃除しなければならなかった (Paroissien 66)。おびただしい数の少年が、想像を絶するような過酷な仕事に従事していたのだ。

煙突掃除の少年たちは、煙突の中をモグラのようにはい回っていた。だから、とうぜんススや煙で汚れて、まっ黒になる。英語には、as black as a sweep という慣用句がある。この慣用句は、直訳すれば、「煙突掃除人のように黒い」となるが、一般的な意味は「まっ黒な、きたならしい」という意味をあらわす。

きたなくて危険な仕事をしていた煙突掃除人は、まっ黒に汚れていた。それ

ゆえ、社会からは「きたならしい」と差別的な視線で見られていた。そのことを、この慣用句はあきらかにしている。

19世紀の中頃に活躍したヘンリー・メイヒュー (Henry Mayhew) は、「(煙突掃除人は) 仕事の性質上、きたない格好をしているだけでなく、ひどい臭いもするので、ほかの労働者といわばつき合いを禁じられていた」(249-50) と書いている。煙突掃除人たちは、きびしい差別の中で、独自の集団をつくって生活せざるをえなかったのだ。

ということは必然的に、煙突掃除人は労働者の中でも「最下層」と見なされ、労働者階級の人びとからも「侮辱的に扱われて」いたのである (Mayhew 249)。

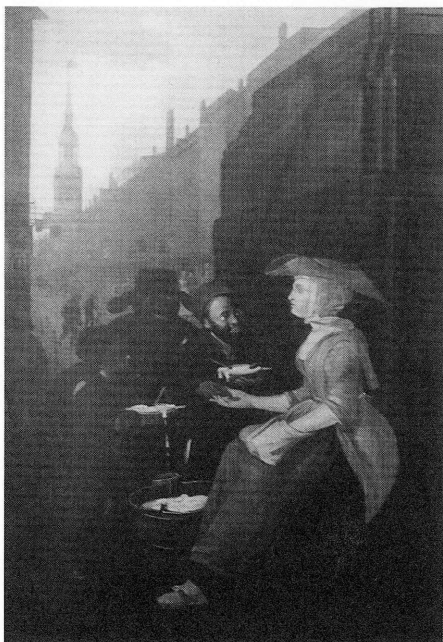
II

英国では、労働者階級は中流階級よりも下の階級だ。英国の社会階層の中での最下位に位置している。その最下位の労働者階級の人びとからも、煙突掃除人たちは差別され、蔑視されていた。

たとえば、次ページの図版2を見てみよう (Galinou 95)。この油絵は、1730年ごろに描かれた。『乳製品売り、チープサイド通り (*The Curds and Whey Seller, Cheapside*)』というタイトルの、127,3センチ×102センチの大きさの絵である。画家名はわかっていない。わたしが遭遇した中では、煙突掃除人が描かれたもっとも古い絵である。

この絵は、タイトルからもわかるように、とうじロンドン第一の繁華街チープサイドの路上で、乳製品を売っている娘を題材にしている。その娘は盲目のようだ。娘の目が見えないことに乗じて、三人の煙突掃除人たちが、乳製品をごまかし盗ろうとしている絵である。三人の煙突掃除人たちは、共謀して、かわいそうな娘の弱みにつけ込んで、娘のつつましい商品をだまし盗ろうとしているのだ。

三人の煙突掃除人たちは、まっ黒の顔をしていて、その顔には下卑た笑いを浮かべている。この三人は、アメリカの黒人を描いた1800年代の戯画を思い



図版2 (Galinou 95)

ださせるところがある。歯が白く描かれている点でも、黒人の戯画と同じだ。(これは、ススには歯を白くする効果があるととうじ考えられていたこと [Phillips 153-54] をも反映しているだろう。) だが、三人の煙突掃除人はもちろん白人だ。白人だけれども、ススで黒く汚れているのである。

一方、かわいそうな娘は、白を基調とした清純な姿で描かれている。街頭で(自家製の?)モノを売っているのだから、貧しい娘であるはずなのに、清潔でござっぱりとした服装をしている。神々しいまでに輝く白い膚や顔つきをしている。

煙突掃除人と娘との間には、あざやかなコントラストが意識されている。黒と白との明暗の対照。野卑と清純との対照。悪と善との対照などである。

すでに1730年代には、煙突掃除人は、悪に染まっていて、下品で粗野であるという、ひじょうに否定的なイメージをもたれていたのがわかる。清純な白と対極にある、典型的な黒(邪悪・低劣)として、煙突掃除人はイメージされ

ている。

III

煙突掃除人は、社会に必要な存在だった。だが、煙突掃除人以外の人びとからは、唾棄されるべき存在として、差別され蔑視されていた。そのことが、先の絵には、残酷なまでに明快にあらわれている。

差別され蔑視されている煙突掃除人たちは、社会の底辺で生活せざるをえなかった。その生活はとうぜんながら悲惨だった。とりわけ、実際に煙道に入って、ススやホコリを掃きだす少年たちの生活は悲惨をきわめていた。

ただし、人間には、自分に都合の悪いものや、自分が見たくないものは、見えていても、見えないという身勝手な性向がある。だから、かなり長い間、煙突掃除の少年たちの過酷な環境や非人間的な労働の実態は、差別や蔑視の原因にはなっていたが、それらが改善されるべきだとは、一般の人びとには見なされることはなかった。煙突掃除少年たちのひどい実態は、かなりの間、世間の関心を集めることがなかったのだ。

煙突掃除の少年の悲惨な生活を改善しようという運動が組織化されたのは、18世紀の後半になってからだった。煙突掃除の少年たちもまた、存在はしているけれども、少なくとも二百年以上にわたって「見えない人間」だったのだ。

それでも、1780年には、ジョーナス・ハンウェイ (Jonas Hanway) を中心にして、煙突掃除人たちの待遇の向上をもとめる委員会ができた。そして1788年には、条例 (An Act for the better regulation of chimney-sweepers and their Apprentices) が制定された。徒弟は8歳以上であること、一人の親方には6人以上の徒弟の禁止、徒弟の貸し出し禁止、じゅうぶんな衣食住の提供などを、条例は定めていた (Cullingford[2000] 107)。しかし強制力を欠いていたため、実効はあまりなかった (Website; Education Resosurces)。実効がなかったことは、同様の条例が1834年、1840年、1864年と、何度も繰り返しかえし制定されていることからわかる。

実効がなかったことは、言い換えれば、煙突掃除人の悲惨な境遇があまり改

善されなかった証拠でもある。たとえば、松村昌家氏は「1860年代に入ってからでも、五、六歳どころか四歳半の幼児までが、煙突掃除の市場にかり出される始末であった」(220) ことを指摘している。このことと、煙突掃除に16歳以下の少年の雇用を禁止する条例(1840年)が、1864年に修正されて、場合によっては10歳以下の少年を使ってもよくなったこと(Website; Education Resources)とは何らかの関係があると思われる。つまり、この修正は現状の追認という意味があったように思われる。

そういう悲惨な煙突掃除の少年を描いた文学作品は、少数ながら存在もする。

まず、先のハンウェイが、煙突掃除の少年の保護のために先駆的な活動をしていたのとほぼ同時期に、ロマン派の詩人で画家のウィリアム・ブレイク(William Blake)が、詩集『無垢の歌(*Songs of Innocence*)』(1789)の中に「煙突掃除の少年(The Chimney Sweeper)」という詩を入れている。おそらく、煙突掃除の少年の悲惨な境遇を描いたすぐれた文学作品としては最初期のものだろう。つぎの様な詩である。

When my mother died I was very young,
And my father sold me while yet my tongue
Could scarcely cry weep weep weep weep.
So your chimneys I sweep & in soot I sleep.

There's little Tom Dacre, who cried when his head
That curl'd like a lamb's back, was shav'd, so I said,
"Hush Tom never mind it, for when your head's bare,
You know that the soot cannot spoil your white hair."

And so he was quiet, & that very night,
As Tom was a sleeping he had such a sight,
That thousands of sweepers Dick, Joe, Ned & Jack
Were all of them lock'd up in coffins of black.

And by came an Angel who had a bright key,
And he open'd the coffins & set them all free.
Then down a green plain leaping laughing they run
And wash in a river and shine in the Sun.

Then naked & white, all their bags left behind,
They rise upon clouds, and sport in the wind.
And the Angel told Tom if he'd be a good boy,
He'd have God for his father & never want joy.

And so Tom awoke and we rose in the dark
And got with our bags & our brushed to work.
Tho' the morning was cold, Tom was happy & warm,
So if all do their duty, they need not fear harm. (Blake plate12)

上記の詩の日本語訳はつぎのようになる。ただし、梅津済美氏の訳（206-07）を参考にした拙訳である。

母さんが死んだとき、ぼくはとても小さかった。
それで父さんは、ぼくが満足にピーピーと泣けもしないうちに
ぼくを売ってしまった。
それで、ぼくは煙突掃除をしていて、ススまみれで寝ている。

トム・デイカーというチビちゃんがいる。子羊の背毛のような
巻き毛のその子は、頭を剃られたとき、泣いた。それで、
「泣くな、気にするな、坊主なら、お前の汚れてない髪の毛も
ススで汚されることもないだろう」と言ってやった。

すると、その子は静かになった。そしてその夜、

眠っていたとき、その子はこんな夢を見た。

ディック、ジョウ、ネッド、ジャック、何千もの煙突掃除の少年が
みんな全員、黒い棺桶に閉じこめられた。

そしたら、輝く鍵をもった天使が通りかかり、
その棺桶を開けて、みんな全員を自由にしてくれた。
みんなは、跳びはね笑いながら、緑の原っぱを駆けおり、
川で身体を洗い、太陽の光にキラキラ輝く。

まっ白な裸になって、仕事袋をぜんぶ捨ておいて、
雲の間に舞いあがり、風の中で遊ぶ。
そのとき天使はトムに言った。いい子にしているなら、
神様が父さんになってくれるし、ぜったいに嬉しいことばかりだよ、と。

そこで、トムは目覚めた。ぼくらは夜明け前に起きて、
それから仕事の袋とブラシをもち、仕事にむかった。
その日の朝は寒かったけれど、トムは幸せで温かかった。
やるべきことをやれば、ひどい目に遭うのを恐れなくていいんだ。

この詩の主人公の「ぼく」は、母の死によって、言葉も話せない幼いころに、煙突掃除の親方に売りとばされた少年だ。もちろん親に売られる場合もあったが、多くの場合、煙突掃除の少年は、メイヒューも指摘しているように、収容しなければならぬ貧しい未成年者は教区にとって重荷になったので、「もっとも手っとり早くて安上がりな方法」として「教区から年季奉公に出された少年たち」(Mayhew 250) だった。ロビンソン (Tony Robinson) が言うような「たいていがもともとストリート・チルドレンで、安い労働力を得たい煙突掃除人によって、拾われた」(ロビンソン 280) という主張は、不正確な誇張であろう。

詩の第一連で、ブレイクは、子どもの理不尽な悲惨さを強調するために、親

にちょくせつ売られた少年という設定にしている。売られた子どもである「ぼく」は、現在、煙突掃除をしていて、ススやホコリまみれになって働き、そのまま眠っていると告白する。

この第一連から、すでに煙突掃除の悲惨な境遇が描かれている。まず、煙突掃除の少年たちは、ごく幼いときに、親に捨てられるという人生最大の悲劇を経験している。それだけでなく、身体を洗うことがほとんどなかった。

この身体を洗わないことは、煙突掃除人たちの共通した特徴だった。たとえばメイヒューは、「(1850年ころには) 煙突掃除人は以前よりひんぱんに身体を洗うようになったようだ。議会での証言によると、煙突掃除の少年たちが、身体を洗うのは、半年に一度か、週に一度か、二〜三カ月に一度だった。ただし、一度も身体を洗ったことがないという証言はどこにも見いだせないが、証言の調子から、そういうこともあったとじゅうぶん結論できる」(254) と、煙突掃除の少年たちには、身体を洗う機会がほとんどなかった実態を書いている。身体を洗わなければ、とうぜん、きたないし、強い悪臭もする。きたなくて臭ければ、人の世の常として、差別され軽蔑されることになる。

第二連では、「ぼく」は、トムという幼い新入りが、親方のもとに入ってきたことを語る。その子は、煙突掃除には髪の毛は邪魔になるという理由から、汚れのない(原詩では white=白い)巻き毛をくりくり坊主に剃られる。「白い」髪を剃られることは、ススまみれの「黒い」世界に入ってゆくための、いわばイニシエーション(加入の儀式)なのだ。

その儀式のとき、その子は泣き叫ぶ。それに対して、「泣くな、気にするな、坊主なら、お前の汚れてない髪の毛もススで汚されることもないだろう」と、「ぼく」は慰(なぐさ)めてやる。この屁理屈には、もちろん、同じ境遇にいる「ぼく」の辛さと悲しみと、新入りの幼いトムへの同情とが読みとれる。トムも、「ぼく」の意図と想いとを、本能的に感じとったのか、泣きやむ。

トムがその悲しい経験をしたその夜、トムは夢を見る。トムの見た夢の内容が、第三連、第四連、第五連で語られる。第三連以降では、「ぼく」は、トムの夢の中にも、トムの心の中にも自由に入ってゆく。

夢の中で、トムは、ほかの何千人もの煙突掃除の少年たちと同じように、黒

い棺桶に閉じこめられる。しかし輝く鍵をもった天使が、棺桶の蓋（ふた）を開けてくれて、みんなを自由にしてくれる。自由になった少年たちは、跳びはね笑いながら、緑の丘を駆けくんだり、川で身体をきれいに洗う。まっ白になった裸体は、太陽の光にキラキラ輝く。それから少年たちは、妖精のように、雲の間に舞いあがり、風の中で遊ぶ。そのとき天使は、トムに「いい子にしているなら、神様が父さんになってくれるし、ぜったいに嬉しいことばかりだよ」と言ってくれる。ここで、トムの夢は終わる。トムは目覚めたのだ。

最終の第六連では、「ぼく」とトムとが、夜明け前の寒い中を、仕事に元気にむかう姿が描かれている。寒い夜明け前だったけれども、トムは、直前に見た夢に元気づけられ、幸せで温かい気持ちになっていたからだった。そして最後に、「やるべきことをやれば、ひどい目に遭うのを恐れなくていいんだ」と、「ぼく」が自分にも言い聞かせるように語るところで、この詩は終わる。

トムが夢の中で見た「閉じこめられた黒い棺桶」は、煙突掃除の少年たちが、ススにまみれて煙突掃除をしなければならない過酷な仕事と、それに伴う死ぬほどの苦しみとをあらわしている。

つぎに、黒い棺桶に閉じこめられた少年たちを天使が解放することは、天使のみが、悲惨で死んだも同然の少年たちを救えるのだということを象徴している。言いかえれば、煙突掃除の少年たちを救える者は、この地上にはいないことを暗に示している。しかし言うまでもなく、この詩の力点は、地上の人間には少年たちを救う力がない点ではなく、天使が少年たちを救う点にある。

解放された少年たちは、ススで汚れたまっ黒の身体を川で洗って、まっ白になり、太陽の下で、風とたわむれて遊ぶ。これは、ススを洗い流し、まっ白な裸体になった少年たちが、転生して、妖精のような存在に変身したことをあらわしている。黒と白とがあざやかな対照をなしているように、煙突掃除の少年たちの境遇が、妖精たちとは対照的であることも示している。しかしここでも、詩の力点は、もちろん、みじめな少年たちが天使のはからいで変身して、妖精のように、自由で楽しげで美しい存在になることにある。

また、天使がトムに与える忠告——「いい子にしていたら、神様が父さんになってくれるし、ぜったいに嬉しいことばかりだよ」——は、ブレイクの煙突

掃除の少年たちへの忠告の言葉、あるいは慰（なぐさ）めの言葉と解すべきである。ブレイクは、この世に存在しない天使が少年たちを救済する情景を描いている。そのことから明白のように、ブレイクは現実の世界での少年たちの救済の目処や手立てを示すことはできていない。楽しい明るい未来を夢見させることで、悲惨な境遇の少年たちを慰めようとしている。

現代人の目から見れば、煙突掃除の少年たちの境遇に対する、ブレイクの態度は感傷的で甘いと言わざるをえない。とりわけ、「いい子にしていたら、神様が父さんになってくれるし、ぜったいに嬉しいことばかりだよ」という一節や、「やるべきことをやれば、ひどい目に遭うのを恐れなくていいんだ」という最後の一節は、理不尽で悲惨な煙突掃除の少年たちの状況を、少年たちの個人の問題に転嫁していて、公正ではない。

少年たちの悲惨な状況は、もちろん、「悪い子」だったから、生じたわけではなかった。また、少年たちが「やるべきこと（their duty=彼らのやるべき義務）」を果たしたとしても、少年たちが、親方から殴られなくなったり、仕事でケガをしなくなるわけではなかった。少年たちの悲惨な状況は、親方の命令で、煙突の中に入って掃除をするという仕事から生まれた構造的なものだ。そこを改善しないと、煙突掃除の少年たちの悲惨な境遇は改善されない。

だから、ブレイクのこの詩における、煙突掃除の少年に対する態度は、感傷的で甘い。しかし、先の『乳製品売り、チープサイド通り』という絵画に見られたような、煙突掃除人をただ悪徳に染まっている下品で野卑な異人種のように見下す立場からは、格段に変化している。1730年代からおよそ60年が経過して、煙突掃除の少年は、少なくともブレイクの詩においては、軽蔑的で差別的な視線のみを向けられる存在から、同情的な視線を向けられる存在にまでに変化している。

しかも、このブレイクの詩は、先にも述べたように、同じ作者の五年後の詩集『経験の歌 (Songs of Experience)』（1794）の中の同じタイトル詩「煙突掃除の少年」とともに、煙突掃除の少年がすぐれた文学作品で取りあつかわれたもっとも早い例のひとつだと思われる。その意味では、ブレイクのこの二つの詩は、世間のふつうの人びとには、ほとんど見えていなかった「見えない人

間」であった煙突掃除の少年たちを、文学の対象とした点で注目すべきものである。また、煙突掃除の少年たちの、死んでいるのも同然の悲惨で非人間的な境遇に、世間の目をむけさせた意義も大きい。

ブレイクの詩では、煙突掃除の少年たちのイメージは、先の絵の煙突掃除の少年のイメージとは大きく変わった。先の絵に見られたような、邪悪で下劣で異人種のようなイメージから、非人間的な過酷な労働を強いられている可哀想な子どもというイメージをもつようになった。さらに、ススで汚れた身体を洗えば、真っ白な身体があらわれるだけでなく、純粋な心をもった「いい子」であるというイメージも創りだしている。

IV

ブレイクの詩から約40年後、社会に強いインパクトを与える文学作品が登場する。それは、人気作家であったチャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) よる、小説『オリバー・ツイスト (Oliver Twist)』(1837-39) である。詩の読者の数と、人気のあった月刊雑誌に発表された小説の読者の数とでは、その数は比較にならない。ディケンズの小説の社会に対する影響は、ディケンズ自身も自認していたように、かなり大きいものがあつた。

ブレイクの詩からディケンズの小説までの40年間には、とうぜん、煙突掃除人の待遇改善のための粘りつよい努力もつづけられていた。たとえば、煙突掃除の少年を保護する二回目の条例が1934年に制定されている。

この二回目の条例が制定されてから約三年後に、ディケンズは『オリバー・ツイスト』を発表しはじめている。ジャーナリストでもあつたディケンズは、社会の動きに敏感に反応する能力があつた。それだけでなく、社会の矛盾や恵まれない人びとへ強い関心をもっていた。こうした社会状況や彼の性格を考えれば、ディケンズが、彼の小説の中で、この時期に、煙突掃除の少年のことを描くのは必然だつたと言えるかもしれない。

『オリバー・ツイスト』の第三章で、9歳になった主人公のオリバー・ツイストは、収容されていた救貧院で、空腹に耐えかねた仲間を代表して、食事中

に「お願いします、もっとください (Please, sir, I want some more.)」と願いでる。このささやかな願いは、ディケンズによれば、「もっと欲しいなんぞと口にする言語道断の罪を犯した (the commission of the impious and profane offence of asking more)」(小池訳 35) ことを意味していた。「言語道断の罪を犯した」オリバーは、救貧院から追放されて、年季奉公 (apprentice) に出されることになる。

年季奉公人として貸しだされる少年がいることを、救貧院は、張り紙で門に掲示する。その張り紙を、通りがかった煙突掃除人の親方ガムフィールド (Gamfield) が目にする。親方は、その少年を年季奉公人として預かることを決意する。その決心の理由は、報奨金が五ポンドつくことと、救貧院の子どもは「(乏しく貧しい食事から) ちびにきまっている」(小池訳 38) と考えたこととにあった。(言うまでもなく、煙突掃除のためには、少年は「ちび」であれば、ある程よいのだ。狭い煙道を動き回るためには、「ちび」でなければならない。だから、少年たちにじゅうぶんな食べ物を与えずに、人為的に發育不全の状態を保つということも、往々にして行われた。これも、煙突掃除の少年たちの悲惨な境遇を、さらに悲惨なものにする大きな要因だった。)

こういうわけで、親方は、オリバーを年季奉公人として引き受けることを決めて、救貧院側と交渉する。ところが、救貧院側は、報奨金を値切る。親方の評判が良くなかったのと、きたない危険な仕事だったからである。その結果、報奨金は5ポンドから3ポンド10シリングになった。この事実は、煙突掃除の仕事が、人が嫌がる、いかに過酷なものだったかを如実にあらわしている。

その交渉の中で、親方ガムフィールドは、「これまでに子どもが煙突の中で窒息死したことが何度かあったな？」と問われると、つぎの様に答える。

「そりゃあ、煙突の中でさぼっている小僧どもを下りて来させようと思って、火を焚く前に藁を湿らせたからでさ」ガムフィールドが答えた。「煙だけで、火を燃やさなかったんで。ところが煙ってやつは、小僧どもを下りて来させるには何の訳にも立たねえんですが。小僧どもは眠くなっちゃうし、それがまたあいつら大好きときているんでさ。小僧ってのは言うこ

と聞かねえ上に怠けもんだからねえ、旦那、そいつらをさっさと下りて来させるにや、下から景気よくじゃんじゃん燃やすのが一番でがすよ。その方が親切なやり方ってもんでさ。小僧が煙突の中で動きがとれなくなっても、足を焦がしてやりや、がむしゃらになって下りてきますものね。」

(小池訳 39)

何の解説も説明もいらない。ガムフィールドは正真正銘の酷薄非情な人非人だ。今までに「既に三、四人の子どもを怪我で死なせたというので、少しばかり非難的となっていた (under the slight imputation of having bruised three or four boys to death already)」(小池訳を参考にした拙訳 40) のも、とうぜんだという気がする人物である。(小池訳と中村能三訳において、原文の slight [=わずか] が、訳から欠落しているか、ディケンズの黒いユーモアがわかるようには訳されていない。)

作者のディケンズは、12歳のときにはウォレン靴墨工場につとめ、その後もまもなく父親はマーシャルシー債務者監獄に入れられるという生い立ちもあって、社会の底辺にいる人びとにふかい関心をもっていた。だから『オリバー・ツイスト』は、救貧院の非人間的な状況を批判した小説とか、孤児の過酷な境遇を告発した小説と見なされることもある程である。この場面にも、煙突掃除の少年たちの悲惨な境遇に世間の目をむけさせ、その悲惨な状況を改善しようとする意図が、ディケンズにあったのは確かだ。

だから、多少の誇張があったかもしれない。しかし作家ディケンズは、社会改革を求めているリアリストでもあったから、この交渉の場面もたんなる空想の場面ではない。

実際、1841年に出たパンフレットによると、1800年からその時期までに、23人の煙突掃除少年がススに埋まって窒息死し、7人の煙突掃除少年が焼死したと報告されている (Paroissien 66)。また、1817年に英国の下院に提出された報告書にも、煙突の中の少年を働かすために、ワラ (藁) を下から燃やすことが書かれている (Website; Parliamentary Papers)。

しかも注目すべきは、オリバーが煙突掃除人の親方にひき渡されようとして

いるのは、9歳のときだという点だ。この作品の約三年前の1834年、二回目の煙突掃除の少年の保護条例の改正によって、年期奉公人の最低年齢は10歳と決められていた（Paroissien 63）。ディケンズは、その事実を知っていて、意図的にオリバーを9歳にしたと考えられる。というのは、1788年の第一回目の煙突掃除少年の保護条例では、最低年齢が8歳だったからだ（Paroissien 63）。8歳と10歳との間の微妙な9歳にしているのだ。

1834年の二回目の改正による保護条例は、この『オリバー・ツイスト』が出版された1837年ころにも、まだきちんと守られていなかった。そのことを、ディケンズは示唆しようとしている。世間に煙突掃除の少年の悲惨な境遇の実態をアピールして、社会全体が改正された条例を守る方向にむかうことを、作家ディケンズは目ざしていた。そう考えるだ。というのは、ディケンズは、小説には社会を改革する力があると信じていた作家だったからである。

だから、オリバーの年齢を9歳にしているところに、社会の底辺で生きざるをえない弱者へのディケンズの同情と、そうした弱者をたくみに搾取するために、法律すら守ろうとしない社会へのディケンズの怒りとが感じとれる。

ただし、オリバーは、煙突掃除人のもとに年季奉公に出されると知ると、恐れおののき、両膝をつき涙を流しながら、殺されてもよいから救貧院に戻して欲しいと哀願する。その恐れおののいているオリバーの姿を見たのと、気まぐれ(!)とから、担当した判事は、オリバーが煙突掃除人の年季奉公人に出されるのを許可しない。その代わりに、判事は、オリバーが葬儀屋の年季奉公人に出されるのを許可する。葬儀屋の年期奉公人になったオリバーは、やがてその葬儀屋を飛びだし、ロンドンに出て、フェイギン（Fagin）親方の窃盗団の仲間に入る。そういう風に、物語は展開してゆく。

煙突掃除の少年たちのあまりにも絶望的な現況をディケンズは知っていた。だから、オリバーが救貧院から社会へ出る契機を、煙突掃除人の年期奉公人になるのではなく、葬儀屋の年期奉公人になるように変えたのだ。松村昌家氏はそう解釈している（229）。わたしも松村氏の解釈に賛成だ。

『オリバー・ツイスト』は、主人公オリバー・ツイストが社会階層の階段をのぼり最後には紳士にまでになるという、オリバーの出世物語（ロマンス）と

しての一面をもつ。だから、煙突掃除の少年から始めるのでは、出世物語の始まりとしてはあまりにもありえないと、作家ディケンズは考えた。あるいは、煙突掃除の年期奉公人になれば、いくらロマンスの中とはいえ、煙突掃除人以外になるのは不可能だと、読者は考えるだろうと、つまり世間の人びとは考えるだろうと、ディケンズは判断した。だから作家は、煙突掃除人に出されるくらいなら殺された方がマシだとオリバーに哀願させ、オリバーを葬儀屋の年期奉公人になることから人生を出発させた。そう推測するのである。逆にいえば、煙突掃除人の世界は、それ程に一般の社会から隔絶された最底辺の世界だったのだ。(余談だが、煙突掃除人の正装(盛装?)は山高帽子に燕尾服だが、これは葬儀屋の服装と同じである。その理由は、煙突掃除人が葬儀屋の着古したものを利用したからだという見解(Website; Chimney Sweeps: History and Customs)がある。もし事実なら、両者の社会的な階層関係を推測するうえで、おもしろい事実だ。)

最後にまとめると、ディケンズは、『オリバー・ツイスト』で、煙突掃除の仕事に追い込まれてゆく少年たちにふかい同情を寄せると同時に、その少年たちを巧みに搾取して繁栄している偽善的な社会に強い怒りをあらわしている。これは、ブレイクの詩に見られた、煙突掃除の少年たちへの、たんなる同情や憐憫を超えている。

ブレイクの詩には、煙突掃除の少年たちの悲惨な状況は、あたかも少年たちの心の持ちようで、状況が改善されるような幻想を与えるところがあった。しかしディケンズは、煙突掃除の少年たちの悲惨な状況は、社会の構造的なもので、少年たちに個人的な責任はないことを明快に描いた点で画期的だった。

結果として、ディケンズの作品では、煙突掃除の少年たちは、偽善的な社会に搾取されている、社会の最底辺の哀れな子どもたちというイメージをもって

V

ディケンズの『オリバー・ツイスト』が出版されてから、24年後の1863年

には、チャールズ・キングズリー (Charles Kingsley) の『水の子どもたち (The Water Babies)』が出版された。

この作品は、英国の児童文学の先駆けと言われている。だから、説教くさくて理屈っぽいところをさし置いても、児童文学に完全には成りきっていないところもある。たとえば、作品中の語り手が、「大地はまだふかく眠っていた。美しい人はたいいそうだけれど、大地の女神も、覚めているときより眠っているときのほうが美しい (Earth was still fast asleep; and, like many pretty people, she looked still prettier asleep than awake.)」(芹生訳 18) という感想をとつぜん述べたりする。この感想は、大人の男の読者を意識したものである。

さて、この作品を要約すると、つぎのようになる。主人公の名はトム。10歳のトムは、朝の三時に起きて、親方に殴られながら大きな屋敷に行く。その屋敷で、トムは煙突掃除を始める。しかし、あまりにも大きな屋敷で、煙道が複雑に入り組んでいたのも、トムは煙道の中で迷ってしまい、その屋敷のお嬢様が寝ている部屋に出てしまう。

その部屋で、トムは、鏡に映った自分の姿を初めて見て、自分がサルのようにみにくく、きたないことに気づき、「はずかしさと腹立たしさのあまり」(芹生訳 44)、泣きながら、暖炉から再び煙道に戻ろうとした。そのとき、暖炉の鉄格子を倒してしまう。

大きな音に目をさましたお嬢様は、悲鳴をあげた。悲鳴を聞きつけてやって来た屋敷の人びとから、トムは必死で逃げた。屋敷中の人間全員がトムを追いかけた。猟犬までもトムを追いかけた。それでもトムは、屋敷を走り抜け、森を抜け、荒れ地を抜け、険しい崖を這い降りて、追っ手から逃れるために死にものぐるいで逃げた。

崖の下の方まで逃げたとき、トムはかくまわれた。しかしそのときには、トムの生命は限界に達していた。かくまわれた納屋の干し草のうえで寝入り、それから夢うつつの状態で、まるで妖精の声に導かれるように、小川の中に入ってゆき、おぼれて死ぬ。

小川の中で息を引きとったトムは、愛らしい姿をした、清潔で美しい妖精の

ような、約10センチの「水の子」として再生する。（「水の子」は、正確には妖精ではないが、以降は妖精と表記する。）水の中でも生きられる不思議な生き物、つまり「水の子」として、死後のトムは、経験と冒険を重ねながら成長する。妖精となったトムの成長の過程が、全八章の『水の子どもたち』の中の六章を使って描かれている。

逃げるトムが、猟犬もふくめて、屋敷の人全員から追跡されるのは、煙突掃除人たちが、社会のあらゆる階層の人から、差別され蔑視されていることを意味している。断崖の果ての別の村で、初めてかくまわれるのは、煙突掃除の少年は現在のコミュニティ（この世）では救われないことを象徴している。さらに、泥棒と誤解されることによって、追跡されることは、煙突掃除の少年たちが、本人には責任がない不合理な理由によって、差別され、社会から追放されていることを象徴している。川に入りこんでおぼれて死ぬのは、ススに汚れた身体を洗い流し清潔できれいな身体になりたいという、死ぬまで叶えられない煙突掃除少年たちの願望をあらわしている。

煙突掃除の少年トムが、妖精トムとして転生再生するというストーリーの展開には、もちろん、作者キングズリーの煙突掃除の少年たちに対するふかい同情と、その哀れな少年たちを容認している社会への反発や絶望とがあらわれている。

このキングズリーの『水の子どもたち』と、先に分析したブレイクの詩「煙突掃除の少年」とには、つぎの様な五つ共通点がある。

(1) 夢の中とファンタジーの中との違いはあるが、ススで汚れた身体を川の水で洗うことで、まっ白な裸体となって再生する。

(2) 川の水で身体を洗うことが、妖精（正確には、妖精的な生き物）として再生するための契機となっている。

(3) 妖精となることが、現実の煙突掃除の少年であることの対極の（夢のような）状態としてとして描かれている。

(4) ブレイクの詩の「ぼく」もトムも、そして『水の子どもたち』のトムも、「父親の記憶がなかった」（芹生訳 49）ところが同じである。

(5) ブレイクの詩の「ぼく」によって語られる幼い煙突掃除少年の名前がト

ムであり、『水の子どもたち』の主人公の少年の名前が同じトムである。

この五つの共通点からだけでも、キングズリーは、ブレイクの詩からインスピレーションを受けて、『水の子どもたち』を書いたのは間違いないだろう。

しかし、ブレイクの詩「煙突掃除の少年」と、キングズリーの『水の子どもたち』との間には、もちろん違いがある。

いちばん大きな違いは、ブレイクの詩では、語り手の「ぼく」もトムも死なないが、キングズリーの物語ではトムがいったん死ぬ点にある。

ブレイクの詩では、煙突掃除の少年が夢の中で、天使に助けられ、まっ白な妖精に変身して、天使に忠告されるのを経験して、翌朝、温かで幸せな気持ちで仕事に再びむかう姿が描かれている。

一方、キングズリーの作品では、煙突掃除の少年は、誤解されることで、獵犬もふくめたコミュニティー全体から追跡され、逃亡の果てに、疲労困憊のため夢うつつの状態で川に入ってゆき、おぼれ死ぬ。その後、妖精としてファンタジーの世界で転生し、経験を重ねて成長する。キングズリーの作品では、煙突掃除の少年は、死を契機にして、妖精に変身するのだ。

18世紀末のロマン派の詩人ブレイクは、煙突掃除の少年に同情と関心をもっていたが、その少年たちの救済の困難さをおそらく痛切には知らなかった。天使に助けられたり、まっ白な妖精に変身する夢を見たぐらいで、煙突掃除の少年たちの悲惨な境遇が軽減される程、少年たちの境遇は生やさしいものではなかった。そのことを、18世紀末の人びとも同時代のブレイクも、キングズリーのように実際に少年たちの救済に関わっていなかったから、実感できていなかったのだ。

社会の底辺の人びとを救済しようとしていたキングズリーは、現実の煙突掃除の少年たちの境遇をよく知っていた。だから少年たちが、夜に見る夢によって、現実の仕事や生活の苦しみが軽減されるなんてことはありえないのがわかっていた。

キングズリーは小説も書いたが、ほんらい、不平等や貧困をなくしようとした社会改革に熱心な牧師だった。キリスト教社会主義者を自称していた程で、社会の底辺にいる人びとと身近に接して、彼らの救済に献身していた。彼らの

実態もよく知っている牧師だったから、おそらく、キングズリーは、煙突掃除の少年がその悲惨な境遇から抜けだすには、死ぬことしかありえないという残酷な前提から、この『水の子どもたち』というファンタジーを始めざるをえなかったのだ。

この前提は、約74年前のブレイクの詩には見いだせないものだ。また、この前提の存在こそが、ブレイクが描く煙突掃除の少年のイメージと、キングズリーが描く煙突掃除の少年のイメージとの最大で唯一といえる程の違いである。

さらに、キングズリーのこの前提は、約24年前のディケンズの作品と比較しても、きびしく絶望的なものだ。ディケンズも、確かに、煙突掃除の少年たちがその悲惨な境遇から抜けだせることはおそらくありえないという想定のもとに、オリバーの人生を、煙突掃除人の年季奉公人ではなく、葬儀屋の年季奉公人として人生を始めさせている。しかしディケンズの場合は、あくまでも想定なのだ。可能性の問題なのだ。ところが、キングズリーの場合は、煙突掃除という境遇からの脱出は「死ぬ」こと以外にありえないという前提なのだ。『水の子どもたち』は四分の三がファンタジー物語であるから、あまり意識されることはないが、その前提は、暗く絶望的なものだ。

その暗く絶望的な見方は、キングズリーの描くトムについての、つぎの様な描写にも見いだせる。作品中で、「水の子」に変わった直後のトムに対して、妖精の女王は「この子は、今は、野蛮人なの。死を免れないけだものみたいな者なの。そのけだものたちから、この子は学ばなければならないの（拙訳）（He is but a savage now, and like the beasts which perish; and from the beasts which perish he must learn.）」と、妖精たちに語って聞かせる。（この部分は、芹生訳では、「その子は今はまだ、ものの道理がわからない、けもののような存在です。ですから、けものでなくなるために、自分で学ばなければならないのです（芹生訳 83）と、原文から離れた超訳になっている。）

つまり、妖精の女王の口を通してではあるが、煙突掃除の少年だったトムのことを、「野蛮人（savage）」とか「けだもののような者（like beasts）」と断定している。このことは、作者キングズリーが、煙突掃除の少年たちは文明社会から一線を画する存在であることを認めていることをあらわしている。煙突

掃除の少年たちの現況と煙突掃除の少年たちを取りまく状況とは、それ程までに絶望的に、キングズリーの目には映っていたのだ。

キングズリーが煙突掃除の少年たちの現状にむける、そういう絶望的な視線は、物語の冒頭での、10歳の主人公トムを紹介のつぎの様な部分でも見いだせる。

トムは読み書きができなかった。でも、そんなことはなんとも思っていなかった。トムはこれまで、一度もからだを洗ったことがなかった。というのも、彼が住んでいた袋小路の奥までは水がこなかったからだ。トムはこれまで、一度もお祈りの言葉を教わったことがなかった。…（中略）…トムは毎日、半分は泣き半分は笑って暮らしていた。泣くのは、まっ暗な煙突の中を、むき出しの膝や肘をすりむきながらのぼっていかなくちゃならないときや、すすが目にとびこんできたときや、これも毎日のことだけど、親方に殴られたときや、これもまた毎日のことだけど、食べるものをすこししかもらえないときだった。（芹生訳 9）

以上から、つぎのことがわかる。トムは教育を受ける機会がなかったこと。教会にも行ったことがないこと（すでに1788年の条例で、安息日には礼拝式にゆかせることが定められている [Website; Sunday, Sunday Observance and the Law]）。一度も身体を洗ったことがないこと。仕事場の煙突では、手足をケガすること。ススが目に入ること。親方に、毎日のように殴られること（たとえば、「親方は喜びのあまり、トムをなぐりとばす」[芹生訳 12] という場面すらある）。食べ物が少ないこと、毎日ひもじい思いをしていること。

それだけでなく、トムはまだ10歳なのに、もうすでに「二度も牢屋に入れられた」（芹生訳 12）経験がある。

煙突掃除の少年を保護する最初の条例が發布されてから約83年が過ぎた、1863年になっても、煙突掃除の少年を取りまく悲惨な状況はほとんど改善されていない。改善がはかどっていないことへの絶望も、作家キングズリーが、煙突掃除の少年たちに対して絶望的で暗い見解を抱く要因のひとつになっている

るのは言うまでもないだろう。

要約すれば、つぎのようになる。キングズリーの『水の子どもたち』では、煙突掃除の少年は、死なない限り、煙突掃除の悲惨きわまる世界から抜けだせないことが前提となっている。物語の中心は子どもむけのファンタジー物語にあるにもかかわらず、そこに描かれている煙突掃除の少年のイメージは、それ以前のブレイクやディケンズの描く煙突掃除の少年のイメージよりも暗く夢のないものである。この作品では、非人間的な仕事をしなければならない煙突掃除の少年は、死ぬまで、親方には虐待され、社会からは理不尽な理由で追放されている子どもというイメージをもっている。

VI

キングズリーは、1863年の段階で、『水の子どもたち』という子どもむけのファンタジー物語の中で、煙突掃除の少年たちの救済は、現状では絶望的であることを描いた。煙突掃除の少年たちのこの絶望的な状況に対して、社会も手をこまねいていただけではなかった。

『水の子どもたち』が出版されてから約12年後の1875年には、煙突掃除人の仕事は、その地域の警察の管理下におかれる条例が成立した。それは結果的に、煙突掃除の親方たちに、これまでの条例を守らせるための強制力となった(Website; Education Resources)。つまり、1840年に制定された16歳以下の少年を煙突掃除人として使役することが、初めて実質的に禁止されたのである(松村 222)。ということは、煙道(煙突)に入りこんで、ススやホコリを手で掃きだすという、過酷で非人間的な労働が禁止されたことを意味していた。なぜなら、16歳以上になれば、とうぜん大人の体格になっていて、大人の体格であれば、煙道に入ることは不可能だからである。

条例上では、1875年以降は、煙突掃除の少年がいなくなったことになる。その結果として、煙道に入って、ススやホコリをちよくせつブラシなどで掻きだすという過酷で非人間的な労働もなくなったことになる。しかしもちろん、条例ができたからといって、すぐさま実効があるというわけではないのは、こ

れまでの例からもあきらかだ。

しかし1875年以降は、煙突掃除は、子どもの仕事ではなく、大人の仕事になっていった。そして大人が、煙突の外から、煙突の掃除をするようになった。

人間が煙突の内部に入れないのだから、その代わりに、先にも述べたスキャンディスコープのような新しい用具を、1827年にはジョセフ・グラス（Joseph Glass）が改良したように、さまざまな工夫をして煙突掃除をするようになった。20世紀の中頃には、電気掃除機と同じ原理の掃除の用具も発明された（*Wikipedia Chimney Sweep*, Cullingford[2003] 30）。子どもの使役の禁止によって加速されたはずの、こうした掃除用具の発明や改良も、煙突掃除人の総人数の減少をもたらした。

また、暖房や料理用の燃料が、煙のたくさん出る石炭から、石油やガス、それから電気に代わったこと、つまりススや煙の出にくいエネルギーへの変換も、煙突掃除人の需要を減らす方向に働いた。そして暖房においても、各部屋にあった暖炉から、セントラルヒーティングへ変化した。つまり暖房の様式の変化も、煙突の総数そのものを減少させ、煙突掃除人の必要性を減少させる要因となった。

さらに、煤煙による大気汚染が深刻化して、人びとに被害をもたらしはじめたことも、暖炉での石炭の使用を禁止する気運を高めた。それは結果として、煙突掃除人の需要を減少させた。たとえば、20世紀中頃の例ではあるが、ロンドンの1952年の大スモッグでは、短期間に約4000人の人が死亡し、その後数カ月で死者はさらに約8000人増えたと言われている（*Wikipedia Great Smog of 1952*）。その結果、1956年に条例（The Clean Air Act）が定められ、煙のでない燃料を使うことが決められた。翌年1957年には、再びスモッグが大勢の死者をだす惨事を引き起こしたので、条例が守られるようになった（*Wikipedia Smog*）。

こういうさまざまな要因が重なって、もっとも悲惨だった煙突掃除の少年たちが姿を消し、しだいに煙突掃除人の仕事も減少し、それに伴って、煙突掃除人の姿も減少した。1950年代には、登録された煙突掃除人は471人いたが、1980年代になると88人になったそう（Cullingford[2003] 29）。現在の英国

では、何人ぐらいの人が、煙突掃除人として実際に働いているかはわからない。ただしオーストラリアのウイーンには、煙突掃除人博物館もあって、そのウイーンには約150人の煙突掃除人がいるようだ（Website; Chimney Sweep Museum）。

煙突掃除人の総数が減少するとともに、煙突掃除人は、多くの人びとにとって、そのきたない姿と悲惨な境遇で人目をひく、目障りな存在ではなくなっていった。煙突掃除人たちは、社会問題のホットは対象ではなくなっていった。それに伴って、それまで差別され卑賤視されていた煙突掃除人に対する、社会の目にも変化が起きてきた。というか、差別され卑賤視されてきた特殊技能集団の別の一面を、ふだんの生活においても、人びとがとつよく意識しはじめた。つまり、日常の生活においても、煙突掃除人を「まれびと」として見なす傾向が生じたと推測できる。

もともと、以前から、ベニタ・カリンフォード（Benita Cullingford）によれば、煙突掃除人の肩をたたくことや服に触れることや煙突掃除人の影を踏むことが、幸運をもたらすと英国のいろんな地方で考えられてきたし、それだけでなく、結婚式に幸運をもたらすとも考えられてきた（Cullingford[2000] 186）。カリンフォードは、結婚式に幸運をもたらすという言い伝えは、18世紀の出来事にその起源を求める伝承を紹介している（[2000] 186）。また、英国の重要なお祭り「五月祭（May Day）」では、18世紀になると、そのお祭りの重要な役割を煙突掃除人がなうようになった（Cullingford[2000] 190）。つまり煙突掃除人は、以前から特別な機会には、幸運をもたらす聖なる存在と見なされてきたのだ。

ドイツの例ではあるが、正月に煙突掃除人に会えることは幸運なことだと、以前から考えられていた。そして1920～30年代になると、煙突掃除人に街中で会えることが珍しくなり、煙突掃除人に会えることは、正月でなくても、いつでも幸運だと考えられるようになった（Website; Yronwode）。同様に、英国でも、煙突掃除人のイメージは、第一世界大戦の終結（1918年）から第二次世界大戦（1939年）までの間に、「劇的に（dramatically）」変化した（Cullingford[2003] 29）。

現代の英国でも、結婚式で煙突掃除人に会えることは、新郎新婦にとって幸運の印だと考えられている。そして煙突掃除人と握手したり、煙突掃除人のキスを受けることは、その幸運を確かなものにすると考えられている。(パートの歌う歌詞「握手をすれば幸運が訪れる 投げキッスをしておくれ」も、この伝承と一致している。) だから今日でも、結婚式に煙突掃除人を招くことが行われている (Website; Chimney Sweeps: History and Customs)。

実際、Lucky Chimney Sweep をインターネットで検索すると、ほとんどが結婚式へ煙突掃除人を派遣するという内容のものである。現代の英国では、煙突掃除人は、結婚式において、結婚式を祝福するための役割を担っているのだ。つまり、幸運をもたらす聖なる存在と見なされているのである。少なくとも、現代の結婚式場においては、煙突掃除人は、幸運をもたらす聖なるイメージをもつ存在に変わっている。賤視から神聖視への180度の転換である。

しかし、賤視から神聖視へ、あるいは神聖視から賤視への180度の転換は、とくべつ珍しいことではない。特殊な技能をもつがゆえに、一般社会から差別され卑賤視されてきた人びとが、一転して、ある場面や局面では、聖なる存在として見なされることは、世界中で広く見いだされる現象である。

たとえば、日本では、鎌倉時代や室町時代に、「犬神人」と呼ばれ、差別され卑賤視されていた人びとがいた。しかし一方で、祇園祭のときには鉾をもって先頭に立っていた、つまり聖なる存在になっていたし、また、正月元旦から三日にかけて、天皇の近くまで行って世のケガレを清める芸能を演じた(網野99)。

インドでも、たとえば、現在もきびしい差別にさらされている「ヒジュラ」と呼ばれる人びとがいる。ヒジュラの生活の糧は一般的に「その伝統的職業としての結婚式でのパフォーマンスや、子どもの誕生を祝福する」ことや「各戸を回る喜捨」や「売春」によって得られている(石川 14)。このことから、ヒジュラと呼ばれている人びとが、卑賤視され差別されているが、一方で、ある局面では、聖なるもの、つまり幸運をもたらすものと見なされていることがわかる。

こういう現象が、煙突掃除人についても生じているのだ。16歳以下の少年

を煙突掃除人として使役することが禁じる法律が守られるようになって以来、煙突掃除人のイメージはじょじょに変化する素地ができ、20世紀の初頭（第一次と第二次の世界大戦の間）には、大きく転換したと考えられる。家内安全の重大要素である料理と暖房にふかく関わってきて、そして「火」ともふかく関わってきた煙突掃除人が、ある局面では、幸運をもたらす聖なる存在と見なされるのはとうぜんの成りゆきでもあった。

結論として、つぎのことが言える。煙突掃除人は、歴史的に見れば、悲惨で残酷な歴史を背負っている。最初のころは、軽蔑すべき悪辣で下卑た人間というイメージをもっていた。だが、やがて時代の変化とともに、煙突掃除人の中でも煙突掃除の少年たちが注目されはじめ、少年たちのイメージは、きたないけれども同情すべき少年たちというイメージに変わり、つぎに、偽善的な大人の社会の犠牲になっている最底辺の哀れな少年たちというイメージに変わり、さらには、救済の手段ももはや見つからない悲惨な少年たちというイメージに変わった。しかし最後には大転換をとげて、煙突掃除人は幸運（ラッキー）をもたらす聖なる存在だというイメージが、他のイメージを凌駕するようになった。

だから、映画の中で、煙突掃除人のパートが、「(自分は) 最高にラッキー」とか「自分はラッキーそのものだ」と楽しげに歌うのは、英国における煙突掃除人のイメージの変遷を考えれば、とうぜんでもあった。パートの楽しげに歌う歌を聞きながら、わたしが違和感をもったのは、煙突掃除人にかんする知識が中途半端だったからである。

1964年に封切りされた映画で、パートが「最高にラッキー」な存在で、「(自分と) 握手をすれば幸運が訪れる」と歌い踊るのも、とうじの観客の意識の一面をダイレクトに反映したものだと言える。多くの人にむけて作られている映画が、とうじの多くの人びとの意識のある一面をダイレクトに描いているのは、とうぜんと言えば、とうぜんでもある。

* この文章は、京都府立大学リカレント学習講座『『メアリー・ポピンズ』で学ぼう英語とイギリス社会』の第五回「煙突掃除は素敵な稼業にあらず」という講演（2006年11月4日）をもとにしている。

引用資料

- Blake, William. *Songs of Innocence and of Experience*. Ed. Andrew Lincoln. London: Tate Gallery, 1991.
- Cullingford, Benita. *British Chimney Sweeps*. Lewes: Book Guild, 2000.
- . *Chimneys and Chimney Sweeps*. Princes Risborough: Shire Book, 2003.
- Dickens, Charles. *The Adventures of Oliver Twist (The Oxford Illustrated Dickens)*. 1846. London: Oxford UP, 1996.
- Galinou, Mireille and John Hayes. *London in Paint*. London: Museum of London, 1996.
- Kingsley, Charles. *The Water Babies*. 1863. London: Puffin Books, 1984.
- Mayhew, Henry. *London Labour and the London Poor*. 1851. London: Penguin Books, 1985.
- Paroissien, David. *The Companion to Oliver Twist*. Edinburgh: Edinburgh UP, 1992.
- Phillips, George L. "Sweep for the Soot O!" *Economic History Review: New Series*. Vol. 1, no. 2/3 (1949): 151-54.
- . "The Abolition of Climbing boys." *American Journal of Economics and Sociology*. Vol. 9, no. 4 (July 1950): 445-62.
- Pool, Daniel. *What Jane Austen Ate and Charles Dickens Knew*. New York: Touchstone, 1993.
- Shakespeare, William. *The Riverside Shakespeare*, second edition. Ed. G. Blackmore Evans. Boston: Houghton Mifflin: 1997.
- Travers, P. L. *Mary Poppins*. 1934. London: HarperCollins, 1998.
- Walt Disney's Mary Poppins (An Original Walt Disney Records Soundtrack)*, CD (Walt Disney Records, 2000).
- 網野善彦『日本の歴史をよみなおす』筑摩書房 1991年.
- 石川武志『ヒジユラ』青弓社 1995年.
- キングズリー、チャールズ『水の子どもたち』上下(芹生一訳) 偕成社 1996年.
- サルガードー、ガーミニ『エリザベス朝の裏社会』(松村赳訳) 刀水書房 1985年.
- ディケンズ、チャールズ『オリヴァー・ツイスト』(小池滋訳) ちくま文庫 1990年.
- ディケンズ、チャールズ『オリヴァー・ツイスト』(中村能三訳) 新潮文庫 1955年.
- トラヴァース、P. L.『風にのってきたメアリー・ポピンズ』(林容吉訳) 岩波書店 2000年.
- ブレイク、ウィリアム『ブレイク全著作』(梅津濟美訳) 名古屋大学出版会 1989年.

松村昌家『十九世紀ロンドン生活の光と影』世界思想社 2003年.

ロビンソン、トニー&デイヴィッド・ウィルコック『図説「最悪」の仕事の歴史』
(日暮雅道&林啓恵訳) 原書房 2007年.

“Chimney Sweeps: History and Customs,” *gascoals*, 5 January 2008 <<http://www.gascoal.net/Library>>.

“Chimney Sweep Museum,” *Vienna Webservice*, 5 January 2008 <<http://www.wien.gv.at/english/culture/chimneym.htm>>.

“Child Labor in Nineteenth-Century Literature,” *enotes*, 5 January 2008 <<http://www.enotes.com>>.

“Education Resources,” *Stoke-on-Trent*, 5 January 2008 <<http://thepotteries.org/dates/work.htm>>.

“Report from the Committee of the House of Commons on the petitions against the employment of boys in sweeping chimneys, 23 June 1817,” *Parliamentary Papers*, 5 January 2008 <<http://www.umassd.edu/ir/resources/workingconditions/w4>>.

“Sunday, Sunday Observance and the Law,” *Lawlink NSW*, 5 January 2008 <<http://lawlink.nsw.gov.au/lrc.nsf/pages/R37CHP2>>.

Wikipedia, 5 January 2008 <<http://en.wikipedia.org/wiki>>.

Yronwode, Catherine, “Chimney Sweeps,” *The 'Lucky W' Amulet Archive*, 5 January 2008 <<http://www.luckymojo.com/chimneysweep.html>>.